Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-22

再考:ジェイムズとフッサール(1) : 第一原理・方法としての還元・地平構造

嘉指, 信雄

(Citation)
愛知 : φιλοσοφια,17:22-33

(Issue Date)
2005-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009206

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009206

再考：ジェイムズとフッサール（1）——第一原理・方法としての還元・地平構造——

嘉指　信雄

ジェイムズ哲学を現象学的観点から論じた研究書は、すでにかなりの数にのぼるが、古典的なものとのしては下記のものが挙げられよう。

1. Herbert Spiegelberg, *The Phenomenological Movement*, vol. I and II, 1960
2. Richard Stevens, *James and Husserl: the Foundation of Meaning*, 1974
3. Bruce Wilshire, *William James and Phenomenology: A Study of the Principle of Psychology*, 1968
4. Hans Linschoten, *A Way toward a Phenomenological Psychology: Psychology of W. James*, 1961

本稿では、現象学研究の興隆を背景に「ジェイムズ・ルネサンス」とまで呼ばれるに至ったジェイムズ再評価の動きがどれ程の基盤と意義を有するものなのか、これら先行研究に基づいて改めて検討してみたいと思う。

［1］ジェイムズのフッサールへの直接的影響

質、量ともに驚くべき、ジェイムズが残した書簡を読む者は、必ずや、大西洋を股にかけたその交友関係の広さと深さに、ジェイムズのそうした交友能力をも天才的だと呼びたくなるであろうが、フッサールとの間には、残念ながら、ベルグソンとの間に生じたような緊密な関係が結ばれたことはなかったようである。しかし、全く直接的交渉がなかったという訳ではなく、一言で言えば、「フッサールの側の片思いに終始」(1)したのである。

1882年10月30日、ようやくその名をイギリスの哲学誌 *Mind* やルヌーヴィエの主宰する *Critique Philosophique* に掲載された幾つかの論文を通してヨーロッパの学界にも知られ始めていたハーヴァード大学哲学科の助教授ウイリアム・ジェイムズは、彼より年下ながらすでにプラーグ大学哲学科の教授の位置にあったカール・シュトゥンプ（Carl Stumpf）を紹介状もなしに訪れた。（ジェイムズが大学から一年間の休職許可を得て、エルンスト・マッハを初めとする、哲学や心理学の分野において当時第一線に立つ数多くの学者と接したこの時のヨーロッパ旅行は、ジェイムズが、自己の学識のレヴェルと広さは誰にも劣らぬものであるとの自信を得た旅でもあった。）計12時間ほどに及ぶ会話を3日間にわたってかわすうちに二人の間に育まれた親密感は、深い友情となり、1910年のジェイムズの死まで続くこととなる。シュトゥンプは、ジェイムズとの出会いから4年後にあたる1886年から

１８８９年にかけての３年間、ブレンターノ門下生としてフッサールと研究をともにし、現象学的心理学の発展に少なからぬ貢献をすることになる。したがって、言うまでもなく、シュトゥンプを通して、フッサールはジェイムズの著作を、そして一方、ジェイムズはブレンターノの仕事を知るのである。そしてその結果、ジェイムズは『心理学原理』の中で、ブレンターノの『経験的立場の心理学』の中の『意識の統一性』に関する章に対し、「今までに出会った最良のものである」という大きな賛辞をおくり、又、一方、フッサールは、１９０６年、次のような一節を日記の中に書き記すのである。

「それから、１８９１年から９２年にかけて、心理学の講義を担当することとなり、私は、記述的心理学（descriptive psychology）の文献にあたらなければならなくなったが、実際のところ、私は、期待を抱きつつその仕事に向かった。ジェイムズの『心理学』は、そのときはほんの些かしか読めなかったけれども、いくつかの閃き（*Blitze*）を与えてくれた。伝統にとらわれないで、おのれの見たものをはっきりと書きとめ、記述しようとした勇敢で独創的な一人物を、私はみたのだ。おそらくこの影響は、私にとって甚大でなくはなかったろう。貴重なほんの数ページしか私は読めなかったけれども。実際、記述すること、また忠実であること、これは絶対に不可欠なことである。もっとも、１８９４年の論文 ② を書くまで、私は、そのより多くの部分を読んで書き抜きを作ることはなかった。」③

残念ながら、書き抜きは残されていないものの、ルーヴァンのフッサール文庫に収められている『心理学原理』には、特に「意識の流れ」④、「注意」、「概念」という現象学との関連において非常な重要性を有する三つの章を中心に、数多くの記入がされていると言う ⑤。さらには、公表されている著作の上でも『危機』の中でなされた前述の言及の他、『論理学研究』の一つの注の中でフッサールは、自分を心理主義的立場から解き放ってくれた天才的な記述的心理学者としてジェイムズを賛美している ⑥。

しかしながら、皮肉なことに、Ｗ・Ｂ・ピットキン（Pitkin）によるこの『論理学研究』の英訳本の出版の是非に関して出版社から意見を請われたジェイムズは、「アメリカにおいては、論理学に関するそのような新しく、風変わりな著作に関心をもつものは誰一人ないであろう。」とすげなく答え、すでに完成していたその英訳の出版を一時的にせよ阻んでしまう役を演じるのである。

フッサールは、このような事情を知り、一時的には気分を害したものの、終生、特に彼のもとを訪れるアメリカ人たちに向けて、ジェイムズへの自己の負債を表明してやまなかったという。そして、その表明が単なる外交辞令などではなかったことは、後年、自分が『月報』（*Monatshefte*）を一時、中断したのは、ジェイムズを研究し直すためであったと語ったと伝えられていることや、１９３０年の日記の中に、「自分が言いたいと思っていたことをすでにジェイムズが言い尽くしてしまっていると感じて、」心理学書を書く計画を断念したと書きつけているという事実によって、我々は確信することができよう ⑦。

しかしながら、フッサールがジェイムズの著作のうちどれほどのものを追って読んでいたかは、判然としない。唯、フッサール文庫には「著者から」（*Vom Verf.*）とフッサール自身によって記されているジェイムズの論文「純粋経験の

世界」のリプリントが収められているという。（ジェイムズが残した尨大な数の書簡の中にフッサールの名前が一度も現れてこないことを考えると、これは、晩年、ジェイムズがフッサールに対して実質的な関心を抱くようになったことを示すものではなく、自分への賛辞の述べられている『論理学研究』の英訳出版という計画を自らが流産せしめてしまったという事情を何らかの機会に知ったジェイムズが謝意の印として贈ったものであるかのように思われる。しかし、これは、憶測にすぎない。）

以上、我々は、非常に全般的なレヴェルにおいてではあるけれど、従来あまり知られることのなかったフッサールへのジェイムズの影響の大きさを見てきた。次に、両者の哲学のより具体的な内容における比較に移る前に、ここで確認されておかなければならぬことがあろう。シュピーゲルバーグは、フッサールに最も大きな影響を与えた哲学者はジェイムズであったと述べているが(8)、一人の思想家にとって、他の或る思想家から受けた影響がいかに顕著で、決定的なものであるにせよ、それは、その思想家の全体的な思想の形成過程の側から見るならば、他の多くの内的・外的要因のうちの一つにすぎないのであり、又、その影響も、単なる受動的受容を通しては何らの発展的成果を産み出すものではないということである。そもそも、同じ未踏峰を目指してすでに登りつつある者によってのみ、少し先を進んでいく先達の残していく標（しるべ）の意味と真価は理解されるものであろう。そして、両者ともに、いまだ雲に隠された頂きへの不確定な途上にあるという事実においては何ら違いはないのであるし、二人が、同じルートを辿って同じ頂きに達するとは限らないであろう。二人は、全く違ったルートをそれぞれ切り拓いてきていたところ、思いがけずそのルートが出会うに至ったにすぎない場合もあろうし、後から行く者が、より良きルートを切り拓き、先に到達するかもしれない。又、雲の上に出た時、全く別の頂きを征服しているお互いを見い出す可能性も少なくはないであろう。

［2］ 原理、方法および学説に関する共通性と差異

（1） 両者の哲学全体を貫く基本的志向の違い

当時の大数学者ヴァイヤーシュトラースに一時師事したこともあり、数学者として出発したフッサールと、一方、一自然科学としての心理学の確立という自らが課した学問的課題と自己の哲学的、宗教的問題意識との相克、葛藤の中から哲学的思索を始めたジェイムズとの間に、学問における研究的な目標、その扱う問題領域、さらには文体などの点において著しい違いが存在するのは当然なことではあろう。次に引用するのは、それぞれ、フッサールの『厳密な学としての哲学』(*Philosophie als strenge Wissenschaft*, 1910) と、ジェイムズが前述のシュトウンプに当てた1899年5月16日付の手紙の中の一節である。「この点（自然主義が理性を自然化することによって背理に陥っているということそれ自体）に関しては、論争の決着は事実上ついているのだ、たとえこれから先き実証主義の高浪、そして相対主義という点では実証主義を凌駕しているプラグマティズムの高浪がなお一層高まってきようとも。なるほどかように高浪がなお一層高まってくる事情のもとでは、結論が矛盾に陥っている（たとえば、論理的に同様に価値学的並に実践的理性を否

定することが理性にかなったことだとするのは背理である）からといったような論証が実際上いかに効力の乏しいものでるかは明らかだ。偏見という奴はひとを盲目にするものだ。だから、経験事実というものしか問題にしない、経験科学しか内心から承認しないような人なら、結論が矛盾に陥るということに逢着しても、そのために大した戸惑いを感じることはあるまい。かような人はおそらく結果が矛盾に陥るということを《スコラ哲学》だといって排除するだろう。[10]」

「私はまだ、アヴェナリウスの著作は一ページも読んでいないけれど、私は、哲学を、今、現在の時点で、体系的に精確（exact）にしようとする全ての試みに対して、ア・プリオリな不信をもっている。人が、《厳密に学的》（*streng wissenschaftlich*）という言葉を好んで頻繁に使うようになったら、私は、その人間は、真理について浅薄な感覚しか持ち合わせていないのだと見做す。全くのところ、我々の思想の現在の状態においては、厳密さ（*Strenge*）について語ることが少なくなれば少ない程良いように私には思われる。[11]」

フッサールの哲学的思惟は、数学的思惟を心理学的に分析する試みの中で直面した自己矛盾的な問い――「全く事実的認識とはいえない学問の根本的なことが、いかにして心理学的考察すなわち事実科学的究明によって可能となるのか」という問いを契機として、みずからの心理主義の立場を否定することによって始まった。真理認識の妥当性を人間という種（シュペツィエス）にとって相対的なものに限定することを意味する心理主義は、フッサールにとって、「懐疑主義の現代的形態である人間学主義」として断罪されねばならなかった。故に、フッサールは、真理自体の世界へと到ることを可能ならしめる「厳密なる普遍学としての哲学」、つまり、直接的絶対的所与としての意識経験の中に自己明証的に存在するもの以外を自らの前提としてもたぬ、無前提の知識の体系としての哲学の可能性を学問論的に追求することを自らの第一の使命としたのであった。

一方、ジェイムズは、原因、結果の因果法則によって統合された一自然科学としての心理学を築くに際し、その成立条件として、唯物論的作業仮説と生物学的進化論を前提とした。意識の状態の直接条件は大脳両半球における何らかの活動であるということ、つまり、原因としての脳の生理科学的活動に対し、結果としての心的活動が存在するという唯物論的仮説、及び、心的活動は、元来、有目的的であり、故に、刺激流を内部に伝達する繊維と、刺激流を転回する中枢器官と、そして刺激流を外部へ伝達する繊維からなる神経系統は、印象を受け、個体及びその種族を保存するべき反応を起こす器械に他ならぬという進化論的見方である。しかしながら、こうした自然主義的見方とジェイムズ自身の奥深い哲学的、宗教的希求とのせめぎ合いこそが、他ならぬプラグマティズム提唱の最も主要な動機の一つであった。この点は、閑却されがちではあるが、正当に把握されなければならないであろう。

「諸君は二つのものを結合せしめるような一つの体系を要求している。すなわち一方においては事実に対する科学的忠実さと事実を進んで尊重しようとする熱意、簡単にいえば、適応と順応の精神であり、もう一つは、宗教的タイプであるとローマン的タイプであるとを問わず、人間的価値に対する古

来の信頼およびこの信頼から生ずる人間の自発性である。そして、これがつまり諸君のディレンマである。」[13]「私は、両種の要求を満足させることのできる一つの哲学として、プラグマティズムという奇妙な名前のものを提唱する。それは合理論とおなじようにどこまでも宗教的たることをやめないが、それと同時に、経験論のように事実との最も豊かな接触を保持することができる。」[14]

少なくともジェイムズにとって、プラグマティズムとは、第一に「科学と宗教の闘争」という時代のディレンマを解決せしめることを目指す「調停者としての哲学的方法」であった。

「プラグマティズム的原理に立つと、神の仮説は、それがその語の最も広い意味で満足に働くならば、真である。神の仮説に伴う様々な困難はなお未解決のままに残るであろうが、この仮説が確かに働いているということ、そして、問題は、他の全ての働いている真理と満足に結びつくようこの仮説を作り上げ規定してゆくにある、ということは経験がこれを示している。」[15]

そして、このプラグマティックな精神に基づく具体的成果こそ、『宗教的経験の諸相』であったのであり、又、ジェイムズ自身は、人間機械論という、言わば真空圏を、自由意志への信念に基づく自らの具体的行為の積み重ねを通して、自由意志そのものの可能性（より正確には、自由意志への信念の可能性）と意義とを自らに確信せしめることによって切り抜けようとしたのであった。ジェイムズも、パスカルと同じく、生の矛盾と問題性との解決を、論理の中にだけではなく、自らの生の経験の形成の中に求めたのであった。

故に、プラグマティズムとは、人本主義（humanism）に他ならないのであり、哲学的命題とは、主観性と別個な世界現象であるMに、それへの思惟者の反応xをプラスすることによってはじめて成立すると考える。個人の寄与面であるxがたとえどんなに小さいものであったとしても、定式化されるべき事実（M＋x）の様相は、xの性格いかんによって一変してしまう。「Mの性格は非決定であって、一方で徹底した悲観論の一部を形づくることもできれば、また他方、改良主義（感覚的楽観論と区別された）道徳的楽観論の一部を形づくることもできる。……定式化されるべき事実にこのような個人の寄与がふくまれているいかなる場合にも、我々が我々の欲するところを信じていいことは、論理的であり正当であり論破しがたいのである。信念はみずからを真実なものにする。願望が思考の父であったように、思考はまさしく事実の父となる。」[16]

以上、フッサールとジェイムズの哲学に対する基本的態度の違いは明らかである。しかも、それは、両者の間にそもそも比較研究が成立するということ自体を訝しく思わしめる程の違いである。しかしながら、この違いは、両者が、全く異なる頂きを目指していたということを意味するのではなく、両者は、「純粋経験」という名の同じ山を正反対の入口から、異なった動機をもって登ろうとしていたことを意味するにすぎないということ、そして、この差異は、以後順を追ってみる両者の哲学の本質的共通性をかえって一層際立たせるものであるということは、次第に明らかとなろうが、ここでは、簡単に以下、三つの点を確認するにとどめよう。

まず第一は、確かに、ジェイムズにとってプラグマティズムとは、「知性に

適用されたる進化論」ではあったのだが、ジェイムズが説いたのは、「科学的事実への忠実さ」ではなくして、「事実への科学的忠実さ」であったということ。ジェイムズにとって「経験」とは、言わば、公認の経験科学がその対象とする種類のもののみではなく、一般には異端視されている心霊現象、超常的能力、神秘体験、心理療法等々をむしろ最も深い不可欠の契機として含む「開かれた領域」を意味し、ジェイムズその人は、偏見からもっとも自由な人の一人であった。したがって、フッサールの実証主義・プラグマティズム批判を、何の留保もなしにジェイムズに当てはめることはできない。

第二には、「純粋経験」を唯一の実在と見做す根本的経験論の立場へとジェイムズを導いたものは、自然科学としての心理学の成立条件として自らが要請した唯物論的・自然主義的見方、及び、その暗黙の前提となっている主観・客観の二元論の孕む矛盾性の痛切な自覚にほかならなかったということ、したがって、フッサールの自然主義批判はジェイムズには妥当せぬこと。(『心理学原理』においては、自然主義的観点を貫徹しようとする意志と、「純粋経験」に基づいて全ての現象を説明しようとする試みとの間に逡巡がみられる。)

第三には、フッサールは、「真知」(エピステーメー)へと至らしめる「厳密なる学としての哲学」の現象学的追求の果て、全ての認識の背景には、憶見(*doxa*)の世界たる生世界(*Lebenswelt*)が不可欠なる「地平」として存在するという逆説的認識に到達したということである。

(2) 哲学の第一原理

根本的経験論の方法的要請である「純粋経験の原理」と、フッサール現象学のいわゆる「原理の原理」(*Prinzip aller Prinzipien*)は完全に一致する。

「純粋経験の原理――

或る一定の時間上、或る経験者によって経験されうるもの以外のいかなるものも事実として許容されないし、どんな特徴をもった事実でもおよそ経験されたことのある事実には、それが占める或る一定の場所が、実在の終局的な体系内のどこかに見出されねばならない。言いかえれば、およそ実在的なものならなんでも、どこかで経験されえなければならず、およそ経験される事物ならどんな種類のものでもどこかに実在していなければならない。」[17]

「フッサール現象学における『原理の原理』――

本原的に与えるすべての直観こそが認識の権利源泉であり、さらに“直観”において本原的に(いわば有体的現実性において)われわれに自己を呈示するすべてのものは、それがみずからを与えるがままに、それもそのとき、それがみずからを与えているその限界内でのみ端的に受けとられねばならない。」[18]

これらの原理が具体的に意味することは、まず第一に、絶対的所与として与えられている経験の流れの中に存在する全ての局面に対して公平な認識がなされなければならないということ、したがって、意識を断片的な観念(idea)や印象(impression)といった原子的要素の集合に帰してしまうイギリス経験論の伝統的見方は否定され、経験の流れはそれ自体の中に、まとまった実質

的部分（substantive state）だけではなく、ロックやヒュームがついに認めることのできなかった内在的関係性に他ならぬ推移的部分（transitive state）をも含んでいるということが、直接的明証性をもって認められることとなる。

そして、これらの原理がそろって意味する第二のこととは、経験の流れのなかにおいて直接的に経験されえぬものは、すべて排除されなければならないということである。したがって、意識経験に直接与えられていないという意味における「超越」としての即自的・客観的な物の存在がまず第一に排除され、又、同様の理由から、常識的見方が前提とする自己同一的な「自我」の存在、さらには、あらゆる科学的理論、常識的信念等が排除されなければならない。

ジェイムズの「純粋経験の原理」も、フッサールの「原理の原理」も、したがって基本的には、存在＝知覚（*esse est percipi*, 存在するとは、知覚されることである）論に立っていると言える。

（3）自覚的方法としてのエポケー（判断中止）の有無

しかしながら、自然的態度のもとに現れる、偽りの超越や様々な根拠なき概念や先入見によってすでに枠付けられてしまっている意識野を、以上のような絶対的所与としての意識現象、もしくは純粋経験へと還元することは、言うまでもなく、容易になされえるものではなく、それをあえて可能にせしめる自覚的方法としてフッサールが提唱するのが判断中止（エポケー, *epoche*）である。そして、フッサールはそれを二つの段階に分け、それぞれ、現象学的エポケー、超越論的エポケーと呼ぶ。

〔Ⅰ〕現象学的エポケーとは、何ら疑うことなく、その時々の特殊的対象に没頭している（＝対象帰依的）ごく日常的な意識の構えである自然的態度（それは科学的研究における態度等も含む）から、対象に対してではなく、対象の意識への現われ方そのものに対して関心を向ける「無関与的考察者」の反省的態度へと「関心の切り換え」を遂行することを意味する。

しかしながら、デカルトの方法的懐疑とは異なり、例えば、客観的存在の措定を全く否定してしまうわけではなく、いわば括弧に入れる（*einklammern, bracket*）、つまり不動の確信を抱いたまま保留するわけである。[19]

〔Ⅱ〕超越論的エポケーとは、現象学的エポケーの遂行後も執拗にまといついている「最も頑固で、最も普遍的で、最も奥深く隠れている内的拘束」[20]である無自覚的な自然的了解、つまり、「世界の先所与性」（あらかじめ与えられているということ）の無自覚的確信を顕在化せしめることを意味する。

したがって、この態度的変更が我々にもたらすものは、現象としての世界、超越論的主観性によってその存在意味を与えられている「全く特殊な意味での現象としての世界」[21]であり、又、自然的態度のもと、その世界の中で遂行される現象としての人間的生、つまり、生世界（*Lebenswelt*）の姿である。故に、生世界とは、日常的感覚をもって観られたる日常的世界（それは、勿論、日々是平凡という意味においてではなく、あらゆる出来事を含みつつも、その見えざる根底に確固たる世界確信を湛えた自然的態度のもとに生きられている世界という意味においてではあるが）などではなくして、存在として

存在しているという最も深き、習性化されてしまっている非顕在的意識を呼び醒まし、そして、世界とは自己の超越論的主観性が構成せる相関的現象に他ならぬという認識を獲得することによってはじめて浮かび上がってくるところの、現象としての人間的経験の世界の謂である。

以上のような方法論的自覚化と絡み合いながらフッサール現象学が深化・拡大されていったのに対し、ジェイムズの「純粋経験の哲学」は、あたかも何の手続きも踏まずにいきなり、そのいまだ主観・客観の区別なき絶対的所与としての意識経験、現象としての意識の流れの関係的諸相を記述し始める如き感がある。

「注意を拡散し、虚ろな恍惚状態にあるかのように眺めることによって」㉒概念的知識ではない直接的知識を獲得することができるといった現象学的エポケーを思わせる記述がジェイムズにもあることはある。しかし、著作を読むかぎりでは、ジェイムズはフッサールのように、還元のための方法を主題化して論ずることは全くなく、むしろ、幼児の経験の世界や、麻酔薬服用による恍惚たる意識状態等を、完全な純粋経験に最も近いモデルとして想定するにとどまっているように思われる。

「『純粋経験』とは、私たちが概念的カテゴリーを用いて後から加える反省に素材を提供する直接的な生の流れに、私が与えた名称である。ただ、生まれたばかりの赤ん坊、あるいは睡眠、麻酔薬、病気とか打撲とかのために半ば昏睡状態にある人だけが、あらゆる種類の〈何〉になれそうになっているのに、まだどんな明確な何（*what*）にもなっていないあれ（*that*）という、文字どおりの意味での純粋経験をもっているとみなせるのかもしれない。それは、一と多との両面で充満しているが、まだ表面に現れない諸点を孕んでいる、あまねく不断に変化しつつあり、まだ非常に混然としているので、その変化する相と相に浸透し合い、相違点も同一点もとらえられることができない。このような状態にある純粋経験は、感じ、ないし感覚の別名でしかない。ところが、純粋経験の流れは、生まれるやいなや、ここかしこと強調点で満たされて行きがちで、こうして強調されて目立ってきた部分部分が同一化され、固定化され、抽象化されることになる。その結果、経験は、まるで形容詞や名詞や前置詞や接続詞などが織り込まれているかのような様態で流れていくことになる。経験の純粋性といっても、それは相対的な表現でしかなく、そこになお含まれているまだ言葉にならない感覚の相対量を意味するにすぎないのである。」㉓

確かに、ジェイムズは、様々な麻酔薬や化学物質の意識状態への作用に強い関心をもち、自分自身しばしば実験してみたようである。そして、その「激しい形而上学的光明（metaphysical illumination）に満ちた途方もなく昂揚的な感覚」が、純粋経験の哲学の形成に際し、一つの大きな契機となっていたことは明らかである。しかしながら、もし、ジェイムズに現象学的領野を開示せしめたものが、そのような特殊な意識状態の経験だけであったのならば、根本的経験論は、フッサール現象学における現象学的エポケーの段階をもって終わってしまい、さらに徹底的に人間の意識生の最深層を顕在化せしめる

超越論的エポケーの次元にまで到達することはできなかったであろう。しかし、逆に言えば、エポケーという自覚的方法が全く欠如していることこそ、根本的経験論、さらにはジェイムズ哲学の全体を理解する最終的な鍵となりうるように思われる。西田幾多郎の純粋経験の哲学においても、彼の「只管打座」の修行がその形成の決定的な要因の一つのなっていることは広く知られているところである。しかし、ここでは、完全な純粋経験の状態に入ることの実際的不可能性は、よく語られるところの完全なエポケー、及び還元を遂行することの困難さ、不可能性に対応するように思われることを述べることとどめよう。

［3］ 知覚と概念の両極性（polarity）、及び縁量構造（fringe structure）

ジェイムズ、フッサールともに、現実は、知覚と概念、もしくは直観と構成の両極的・相補的な認識機能によって形作られていると考える。そして、知覚（直観）こそ、あらゆる人間経験の基礎であるとともに、最終的な目的地であるとみとめ、その優位性を強調する。

ジェイムズは、知識に、感覚（sensation）、知覚（perception）、概念（conception）という三つの段階を分けるが、その違いは、それらがその中に、どれほど明確化、文節化された関係性を含んでいるかといった相対的なものにすぎず、したがって、これら三者は一つの連続体を成していると考える。絶対的所与は感覚であるのだが、ここでは、感覚をも知覚に含ませ、知覚の概念の両極性として論じることにしたい。

いまだ主観でもなく客観でもなく両義的・中立的性格（ambiguity, neutrality）を有するにすぎない絶対的所与としての純粋経験の流れも、前の引用の中で述べられていたように、非常に漠然としてではあるがすでに大まかに構造化されてはいるが、意識の選択的・プラグマティックな関心の、言わば、ふるいに分けによって、より明確な焦点・縁量構造を与えられることとなる。そして、いまだこのような直接的知識（knowledge by acquaintance）の状態にある経験の中から、概念＝～に関する知識（knowledge about）を形成するのを可能にせしめるのは、全く同じ様相を呈することは決してない意識経験の絶えざる流れの中に同一性（sameness, identity）を認識することのできる意識の能力である。そして、無限に多様な視覚像を呈する「物の現われ」・現象の中に、「超越としての同一的な物」の存在を措定するこの能力こそ、あらゆる意識経験を可能にする龍骨、不可欠のバークボーンにほかならない。そして、さらにこの能力の根底を成すものは、同一的な「意味」を絶えず志向する意識の隠されたる目的論的構造である。又、概念を明確化するとは、意識の焦点＝核となっている対象を取り巻いている、いまだ漠然たる縁量＝関係性を明確化・拡大化することに他ならない。

ここで、以下追ってみるように、根本的経験論において決定的な役割を演じているだけでなく、メルロ＝ポンティへとつながるフッサール現象学の〈核（*Kern*）－地平（*Horizont*）〉構造を示唆し、方向づけた[25]〈縁量〉の説明を、ジェイムズの『心理学原理』から引用しておこう。

「我々の承認しなければならないのは、従来、伝統的心理学が説いてきた、一定不変の心像たるものは、実際の心的生活においては極めて小さな部分を構成しているにすぎないということである。伝統的心理学の説くところは、あたかも、川はただ幾桶、幾甃、幾枡、幾樽というような一定の形の水の集合から成っていると言うに等しい。たとい、河の流れの中に、実際、桶や樽があるとしても、なおその間には自由な水が連綿と流れている。心理学者が全く看過ごしてしまっているのは、意識中のこの自由な水である。心中の全ての明確なる心像は、その周囲を流れる自由な水に潤せられている。これがあってこそ、その心像の遠近種々なる関係の感じ、過ぎ来し方の余韻(the dying echo of whence it came to us)、行方の曙光(the dawning sense of whither it is to lead)がある。心像の意味・価値は全て、これを繞り、これに随うこの暈(halo)、あるいは半影の中にある。――否、中にあるというよりもむしろ、これと融合して一になり、その骨の骨、肉の肉となっている。これがために、実際心像としては過去と同一事物の心像であるとしても、更めて受け新たに解せられたるその事物の心像となる。」[26]

フッサールにおいては、知覚(直接的知識)と概念(〜に関する知識)との相補的関係性は、前反省的・前述語的知識と反省的・述語的知識、もしくは、経験の前所与的構造の直観と知識の意味付与的能作(*Leistung*)・構成の相補的関係性として述語化される。しかし、ジェイムズが、意識経験の絶対的所与性及びその自足性を強調するのに対し、フッサールは、主観の構成作用を強調するという差異が存在する。

ジェイムズにとって、主観と客観、精神と物体とは、何ら実体的差異(entative difference)を有するものではなく、あくまでも絶対的所与としての純粋経験が、その経験相互間の関係的・機能的差異(relational, functional difference)にもとづいて回顧的に分類されていくものにすぎないのであるが、フッサールにおいては、世界・客観の超越性は、超越論的主観性の志向的相関者(intentional correlates)として還元後も保持される。この相違は、ジェイムズが、すでに縁量構造を含んでいる意識経験の流れを絶対的所与として受け止め、さらには唯一の実在として認め、その知覚野の流れに内在する諸関係性を記述することを追求するのに対し、一方、フッサールにとって、純粋経験としての知覚野や、その前述語的構造は、エポケーという自覚的方法によって自然的態度を現象学的・超越論的態度へと転換せしめることによってはじめて発見することが可能になるという前述の方法的差異に直接関連しているものと言えよう。

このような差異にもかかわらず、ジェイムズにおいても、フッサールにおいても、いわゆるメルロ=ポンティの「知覚の優位性」(supremacy of perception)の発想が支配的であり、加藤茂氏の言うように、「要するに、『純粋経験』とは、あらゆる派生的意味構造(言語・常識・理論、等々)を可能にし支える確実な基底(=あれ)であると同時に、一切の先入見や偏見を一掃し、あらゆる二次的概念的構築物の真偽性を遡って検証する試金石としての源初的知覚を意味している」[27]のである。

このジェイムズが唱える、「生の流れ、つまり言葉の意味がすべてそこに由来し、言葉を再び吸収する用意のある生の流れへの帰還」[28]は、言うまでも

なく、フッサール現象学の第一モットー「事象そのものへ！」(*Zu den Sachen selbst !*) が意味するところでもある。(学問的) 概念的意味構造と直観との相補的関係を、エピスメーテーとドクサと言いかえて、フッサールも次のように主張する。

「前述語的経験に帰って行き、前述語的経験の最深の最終根源的な層とは何かを洞察することは、いまだ不精密な、そして数学的物理学的に観念化されていない、最終根源的な明証性の領域たるドクサの正当性を認めることに他ならない。この帰還によってさらに、このドクサの領域が、判断する認識やその沈殿物からなるエピスメーテーの領域よりも明証性の点で劣る領域ではなく、まさに精密な認識が当然帰って行くべき最終的根源性の領域であること、精密な認識はその性格からして単なるひとつの方法にすぎず、ありのままをつたえる認識の道ではないと明察されねばならないことが明らかとなる。」[29]

言いかえれば、最も精緻な概念的構成物といえども、それは、或る特定のパースペクティヴ、もしくは限られた数のパースペクティヴに基づいて形作られたものにすぎず、具体的経験の深さと豊かさとを汲み尽くすことはできないのである。したがって、概念的意味構造の首尾一貫性、単純性、統一性への志向は、直接的経験の知覚野のみが提供することができる具体的豊穣さ、複雑さを希求することによって、絶えず補完されなければならない。この考え方は、概念とは目的論的道具に他ならず、故にその真の価値は、純粋経験相互間により有効的で豊かな関係性を築いていくことを可能にするその機能的な力にあるのであり、概念の内容はそれ独自では何ら、プラトン主義的不変性を有する超越的・根源的な世界を構成するものではないと考えるジェイムズにおいては特に顕著であり、前面に強く押し出されてくることとなる。

「哲学の目標が、精神によって全実在を完全に支配する点にあるのならば、直接の知覚経験の総体こそまさに哲学の主題となりうるだろう。なぜならば、そうした知覚的経験においてのみ実在は深くかつ具体的にとらえられるから。……私たちは、知覚的経験においてのみ、連続（あるものの他のもの〈の〉というものに親しく接し、自己に接し、実体に接し、性質に接し、種々の活動性に接し、時間に接し、原因に接し、変化に接し、新しさに接し、傾向に接し、自由に接する。」[30]

―― 注 ――

（1）ウィリアム・ジェイムズ『根本的経験論』枡田啓三郎・加藤茂訳（白水社、一九七八）二八六頁。

（2）*Psychologische Studien* のこと。

（3）Herbert Spiegelberg, *Phenomenological Movement*, 2nd edition (Martinus Nijhoff, 1978) vol. II, p. 112.

（4）教科書用に書きかえられた短縮版 (*Psychology: The Briefer Course*) において Stream of Thought から Stream of Consciousness へと章の名前が改められる。なお、岩波文庫に収められている『心理学』は、この短縮版の

訳である。

(5) Herbert Spiegelberg, *Phenomenological Movement*, vol. II, p. 114.

(6) エドムント・フッサール『論理学研究・二』立松弘孝・松井良和・赤松宏訳（みすず書房、一九七〇）二二八頁。

(7) Herbert Spiegelberg, *Phenomenological Movement*, vol. I, pp. 113-14.

(8) *Ibid.*

(9) エドムント・フッサール『厳密な学としての哲学』佐竹哲雄訳（岩波書店、一九六九）一六頁。

(10) Ralph Barton Perry, *Thought and Character of William James* (Little, Brown and company) vol. II, p. 185.

(11) ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』枡田啓三郎訳（日本教文社、一九六〇）一七頁。

(12) *Ibid.*, p. 27.

(13) *Ibid.*, p. 236.

(14) *Ibid.*

(15) ウィリアム・ジェイムズ『根本的経験論』一三七頁。

(16) エドムント・フッサール『イデーン Ⅰ-Ⅰ』渡辺二郎訳（みすず書房、一九七九）一一七頁。［なお、本稿における訳文は、加藤茂「甦るジェイムズ」（『根本的経験論』二八四頁）による。］

(17) 新田義弘『現象学』（岩波書店、一九七八）六一頁。

(18) エドムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的哲学』細谷恒夫・木田元訳（中央公論社、一九七四）二一三頁。

(19) *Ibid.*, p. 214.

(20) William James, *Principles of Psychology* (Henry Holt & Co., 1890) vol. I, p. 222.

(21) ウィリアム・ジェイムズ『根本的経験論』八四頁。

(22) *Ibid.*, p. 280.

(23) ウィリアム・ジェイムズ『心理学』今田恵訳（岩波書店、一九三七）上、二〇五頁。

(24) ウィリアム・ジェイムズ『根本的経験論』二九四頁。

(25) *Ibid.*, pp. 93-94.

(26) エドムント・フッサール『経験と判断』長谷川宏訳（河出書房新社、一九七五）三七頁。

(27) ウィリアム・ジェイムズ『哲学の諸問題』上山春平訳（日本教文社、一九六一）八三頁。

（文学部教授）